

平成20年度質の高い大学教育推進プログラム審査結果表【選定】

機 関 名	立命館アジア太平洋大学				
取 組 名 称	初年次教育の新モデル構築				
取組学部等	全学				
申 請 区 分	教育課程の工夫改善を主とする取組				
整 理 番 号	A11208	申請の形態	単独	取 組 期 間	3年
申請の分類	初年次教育				
キーワード	First-Year Experience, 学びの転換, APU 入門, ピアリーダー, ラーニングコミュニティ				

<選定理由>

本取組は、初年次学生に学びの転換を促すことを目的として、初年次教育全体の総合化と体系化を進めるプログラムとして高く評価できる。

特に初年次教育セミナー「APU 入門」では、先輩学生をピアリーダーとして配置し、教員による講義とピアリーダーによるワークショップとを組み合わせ、学生の主体的参加を促し、さらに学生の友人関係の構築にも配慮している。また、初年次教育を大学全体の重要な課題として位置づけ、学内の各部署が連携・協力を図れるように大学の意志決定機関である大学運営会議の下に「初年次教育全学委員会」を設置し、さらにはこの委員会を大学全体の評価体制に取り込んでいることにより、この取組がより質の高いものとなることが期待できる。

ただし、様々なバックグラウンドをもつ多数の留学生を受け入れることによる学力の格差、文化の違いなど多くの問題点が存在することも予測できる。今後これらの課題への対策をさらに充実し、着実に成果を挙げることを期待する。

取組の概要【1ページ以内】

(1)取組の背景と意義

大学全入時代を迎える中、学生の学力低下が問題視されるとともに、学習意欲の低下や目的意識の希薄化などが指摘されている。一方で日本の大学の国際競争力を高めグローバル社会で通用する人材を養成することが強く求められている。こうした中、初年次教育の重要性に対する認識が深まっており、高等学校から大学への移行や転換、「初年次学生が大学生になることを支援」すること(=First-Year Experience)がきわめて重要となっている。このように学士課程教育の再構築をはかり教育の質を高めるためには、その基盤をなす初年次教育の総合化・体系化が必要である。

(2)取組の概要

そこで、従来行っている新入生オリエンテーションを精選・体系化し直すとともに、正課と課外の取り組みを有機的に連携させた初年次教育全体の総合化と体系化を進める。1年次演習科目「新入生ワークショップI・II」に加えて、新たに初年次教育セミナー「APU入門(正課・2単位)」（1クラス25人規模、APUの理念と歴史、大学生生活全般への適応や大学への帰属意識の形成）を設置し、学習意欲や目的意識の向上、主体的・能動的学習スタイルの形成など「学びの転換」をはかるとともにラーニング・コミュニティの形成を促進する。

「APU入門」には学生5人に1人の割合でピアリーダー(先輩学生)を配置し、教員による講義とピアリーダーによるワークショップ(グループ活動)を組み合わせ、実践的に「大学生生活成功リテラシー」を修得させる。また、アメリカ等の大学における初年次教育の先進事例を参考にしながら、初年次教育専用のテキスト開発やピアリーダー(先輩学生)の育成(ピアリーダー・トレーニングプログラムとピアリーダーマニュアルの開発)、教員用トレーニングプログラムと教員用マニュアルの開発等を具体化する。さらに学生が興味・関心に応じて選択できる初年次特別プログラムとして、初年次異文化体験プログラム(First:Freshman Intercultural Relations Study Trip)や国際人材育成促進プログラム(留学候補生登録制度:START)等を実施する。

なお、部門を越えた連携・共同によって初年次教育全体を強化する必要があることから、「初年次教育全学委員会」を置く。

(3)取組の目的・目標

この取組の学生教育の目的は、大学生活への円滑な移行と適応、大学の基本理念および歴史の理解と大学への帰属意識(アイデンティティ)の形成、大学におけるアカデミック・スキルの獲得と主体的・能動的な学習スタイルへの「学びの転換」等である。その目標は、1)学生の7割以上が大学生活に満足すること、2)何でも話せる友人がいるという学生を9割以上にすること、3)授業以外の学習時間について学生の8割以上が少なくとも1時間以上は行い、学生の5割以上が2時間以上行うようになることなど、具体的な数値目標を設定して取り組む。

(4)取組の評価

取組の評価は「初年次教育全学委員会」が行い、それを全学の自己点検・評価委員会や第三者が入った大学評価委員会に提案・審議して実施する。また、取組の達成度の検証は、1)学生の視点(成績や自己評価アンケート、授業評価等)、2)ピアリーダーの視点(アンケート、懇談会等)、3)教員の視点(担当教員レポート、総括会議)、4)事務局の視点(学生実態データの蓄積と分析)で行い、上述の具体的な数値目標の達成度などを検証する。PDCAサイクルを確立し、検証結果は次の改善・改革に活かすことを必須とする。